

両大戦の戦争犠牲者数

解説 西山 暁義

両大戦の各国の戦争犠牲者数について教えてください。

「世界大戦」——欧米においては「世界戦争」あるいは「大戦」と表現されるものが、日本語では1つの単語として合体しています。それぞれの命名の経緯はともあれ、「世界」、そして「大戦」という言葉は、戦闘と犠牲の規模の大きさを印象付けるものといえます。第一次世界大戦からは100年以上が、そして第二次世界大戦からは77年がたち、その後の戦争のあり方の変化にもかかわらず、私たちの「戦争」というイメージには、20世紀前半の2つの世界大戦の経験が依然として深く刻み込まれているといつてよいでしょう。

実際、第一次世界大戦では、1914年7月28日のオーストリア＝ハンガリーのセルビアに対する宣戦布告に始まり、18年11月10日、すなわち西部戦線における休戦協定締結の前日に、1度敗れてドイツと講和を結んだルーマニアが文字通り「駆け込み」再参戦するまで、最終的には36カ国が参戦国となりました。第二次世界大戦では、39年9月1日のドイツによるポーランド侵攻から45年9月2日の日本の降伏による休戦まで、当時存在する73の国家のうち62カ国が参戦しています。

もちろん、これらの国家にとって戦争の経験は同じであったわけではありません。しかし、第一次世界大戦では約1500万人が、第二次世界大戦では6000万人以上が命を落とすことになります。19世紀の戦争においてもっとも被害の大きかったフランス革命・ナポレオン戦争(1792～1815年)では250～300万人、その後のクリミア戦争(1853～56年)では約26万人、ドイツ＝フランス戦争(1870～71年)では約19万人であったことを考えると、戦争の暴力性の飛躍的増加は明らかでしょう。

これに対し、アメリカの心理学者スティーヴン＝

ビンカーは、先史時代から現代における暴力の後退を主張するその著『暴力の人類史』(幾島幸子・塩原通緒訳、青土社、2015年)において、歴史上の戦争(とそれに類似する事件)の犠牲者数をそれぞれの時代、地域の人口比から換算しています。それによると、犠牲者の絶対数では「第1位」となる第二次世界大戦が「第9位」に、「第13位」の第一次世界大戦は「第16位」へと「転落」することになります(換算後の「第1位」は安史の乱、「第2位」はモンゴル帝国の征服)。たしかに、私たちの時代に近い戦争こそがより破局的であると思ひ込むことは(逆も同じく)非歴史的ですが、他方で犠牲者数の根拠となる史料の信憑性の問題に加え、何より2つの世界大戦が短期間のうちに広範な地域においてきわめて多くの犠牲者を——まさに暴力の後退が進んでいるはずの現代において——生み出したという事実は、表面的な時代横断的比較によってかわるわけではありません。

すでに言及した犠牲者の数字において、「約」や「以上」「程度」「～」といった留保がついているように、2つの世界大戦に関する様々な文献資料においても、国別に場合によっては数十万から数百万におよぶ幅が示され、資料間でその数が一致しないことがしばしばみられます。これは、そもそも正確な算出が不可能であることに加え、「犠牲者」という概念の定義の問題が背景にあります。そしてこの概念の問題は、同時代の各国のあいだや研究者のあいだの相違だけではなく、歴史的に変化してきたものでもあります。2つの世界大戦を考える場合、このことはきわめて重要です。それは19世紀からの延長線上にあるとともに、20世紀の大量殺戮戦争に直面するなかで変化したものでもあります。

最初に指摘しておくべき点として、軍事用語とし

での「損失」は戦闘で死亡した者だけではなく、戦闘不能となった者すべてを含むものであるということです。すなわちここには傷病者や捕虜、行方不明者なども該当することになります。というのも、軍司令部にとっては、何人死んだかではなく、補充すべき「損失」がどの程度なのかが重要であるためです。たとえば第一次世界大戦におけるヴェルダンの戦い(1916年)は、同年の同じ西部戦線におけるソンムの戦いと並び、大戦の暴力性を象徴するものとみなされています。そして大戦後フランスではヴェルダンの死守が国民的な神話となる一方、第二次世界大戦後には逆に両国和解の演出の場となります。この戦いでの「損失」は約72万人、うちドイツ側の「損失」は約34万人とされていますが、戦間期に公開された資料(『衛生報告書』)によれば、行方不明者を含めた「戦死者」の数は約8万2000人とされています。しかし、しばしば文献のなかでは、「損失」の数が戦死者数であるかのようにあげられている場合もみられます。

こうした「下方修正」が、ヴェルダンの戦いや大戦そのものの持つ意味を否定するわけではありません。むしろ注目すべきは、「損失」「犠牲者」と総称されるなかでの分類自体についてです。戦死者を特定、集計(英語でいう"Body count")することに国家が関心をもつようになるのは、フランス革命・ナポレオン戦争のころからであるといわれています。その背景にあるのは、第1に(実際には多くの行方不明者を含んでいた)戦死者の相続や遺族に対する支援という法的・経済的な問題でした。そして19世紀に国民意識が高まるなか、戦死者を「英霊」、すなわち祖国に命をささげた「能動的犠牲者」とし、各地に地元出身の戦没者を記名する記念碑が建立されるようになります。

戦死者の「個人化」は、それまで戦死者の遺体が戦場に放置されたり、集合墓にまとめて埋葬されたりしていたのが、一人ひとりの名前が刻まれた十字架からなる戦没者墓地への変化にもみられます。クリミア戦争(1853～56年)後には、イギリス軍の墓地が現地に多数設置され(アメリカ合衆国においても南北戦争後にアーリントン国立戦没者墓地が設立)、またドイツ＝フランス戦争では、プロイセンが兵士の身元特定のための認識票をはじめて導入し、その

講和条約では、自国内の旧敵軍兵士の戦没者墓地を維持する義務が両国に課されました。後者は第一次世界大戦後のヴェルサイユ条約においても受け継がれることになります。集合的な「無名兵士」の国民慰霊碑が首都に建設される一方で、戦場となったフランスやベルギーには多くのドイツ兵戦没者墓地が今なお残っているのは、こうした了解にもとづくものでした。それは6000万人以上という空前の規模の兵力を動員した「総力戦」としての第一次世界大戦のなかで、戦死者の特定、すなわち「行方不明者」数の極小化に多くのエネルギーが費やされるようになったことを意味します。そこには、銃後の家族のケアが政治的な課題となる参戦国だけではなく、1864年創設の国際赤十字社も重要な役割を担っていました。

第2に、第一次世界大戦の特徴としてあげられるのが、戦闘での負傷により死亡した兵士の数が、病気による死者の数を上まわった点です。日本の場合、日清戦争と日露戦争のあいだでみられるこの変化を、ヨーロッパ諸国は大戦で経験することになります。戦傷死については、砲弾の殺傷能力の向上など、大量殺戮を可能とする兵器の投入が理由としてあげられます。一方、戦病死については、西部戦線の場合、イギリス軍では罹患兵士約350万人に対し死者は約3万人と、死亡率は1%を切っており、またドイツ軍は戦争期間中に2億回分の予防接種(兵士1人平均15回)をおこなうことで、19世紀後半における(植民地支配のための熱帯医療を含む)医学の進歩が反映されていたことは確かでしょう。ただし、大戦の最終盤に猛威をふるい、大戦以上の犠牲者をもたらすことになる「スペイン風邪」(インフルエンザ)には、感染拡大に絶好の環境であったこともあり、翻弄されることになります。

戦傷者については、戦死した兵士の多くは即死、あるいは治療を受けることなく死亡しましたが、治療を受けることができた場合の死亡率は、ある研究によれば8%と、19世紀の戦争に比べ半減したといえます。しかしこのことは、顔に大きな傷を負ったり、手足を失ったりした義手義足の傷痍軍人たちが戦後の社会で生きることを意味しました。たとえばドイツでは、第一次世界大戦後には約50万人を数え、第二次世界大戦後その数は3倍近くとなりま

す。さらにいわゆる砲弾恐怖症(シェルショック)が各国の兵士のなかでまとまってみられることになるのも、第一次世界大戦でのことであり、長らく臆病といったネガティブな気質に由来する、あるいは短期的な現象とみなされ、経済的な意味での「犠牲者」のなかに入ることは困難でした。このように、たんなる生死の区別をこえて、生き残ること自体にも戦争の影は長く濃いものとなります。

第3に、この医療の問題は、銃後の社会の問題にもつながります。なぜなら、総力戦は医療従事者もまた大量に前線に動員することになったからです。ドイツの場合、約8割の医師が前線に送られたため、銃後の社会において、医師1人当たりの人口は1500人から5800人に悪化しました。フランスではその数は1万4000人まで至ります(現在の日本は400人)。前線でも、医師たちはつぎつぎに運び込まれる負傷兵たちを、戦闘能力回復の可能性からトリアージ(選別)することをよぎなくされましたが、銃後の社会もまさに「医療崩壊」の状況にありました。さらにドイツの場合、イギリスによる海上封鎖の影響で、1916年から翌17年にかけての食糧事情が極端に悪化し(「かぶらの冬」)、1日あたりの平均摂取エネルギーは3400kcalから1000kcalまで激減します。こうした医療・食糧事情の悪化による犠牲者は約60万人であったと推定されていますが、これを「戦争犠牲者」にカウントするか——そしてそれを敵国の封鎖政策を原因とするか、自国の配給制度の問題とするか——によって民間人犠牲者数はかわってくることになります。こうした銃後における犠牲は、敵の残酷さを強調するためプロパガンダとして利用されることはあっても、当時補償の権利が直ちに認知されたわけではありませんでした。

第4に、この前線兵士と民間人のあいだの犠牲者の関係については、2つの世界大戦を比較した場合、第一次世界大戦は前線での戦闘員の大量の死に特徴づけられ、第二次世界大戦は空襲や強制移住、そしてユダヤ人に対する人種主義的絶滅政策などによって民間人の犠牲者が大量に生じたことが指摘されます。とりわけポーランドやソ連、中国など、国土の多くが長期にわたって占領、戦場となった国では後者が前者を大きく上まわる状況が生じました(ポーランドでは、死者は全人口の約17%に達して

います)。ただし、このことはより長期的に考えることも必要です。19世紀後半のヨーロッパでは、ナショナリズムの高まりの一方で、すでにあげた国際赤十字社などにみられるように、戦争の「人道化」の名のもとに、戦闘員と民間人の区別の試みがおこなわれてきました。ただし、それは「文明化された」国家間の戦闘に限られ、植民地をめぐる戦闘では同じ欧米諸国が民間人を標的とする軍事作戦を展開していたことは、ボーア戦争(イギリス)やヘレロの蜂起(ドイツ)などからも明らかです。列強間でおこなわれた第一次世界大戦では、こうしたヨーロッパ内外における実践の区別が止揚され、ベルギーではパルチザンとみなされた民間人が約6500人処刑され、約2万の建造物が破壊されました。その後、前述のイギリスの海上封鎖など、敵国社会全体の士気の低下を目的とする戦略もおこなわれ、その報復・打開としてドイツは軍事・民間の船舶を無差別に標的とする潜水艦作戦を実施します。

ただし、このことはむき出しの暴力によって戦時国際法が否定された、という単純なものではありません。第二次世界大戦時にソ連によって約2万人のポーランド軍人が虐殺された「カチンの森事件」では、ナチス＝ドイツがみずからの残虐行為を棚に上げ、ソ連の非人道性を国際的にアピールしています。とはいえ、大戦が国民(民族)間、イデオロギー間の妥協を許さない戦争へとエスカレートするなかで、戦闘員と民間人の区別はさらに溶解していきました。この観点からみれば、戦時国際法は予防としては機能せず、むしろ事後的な対応であり、戦勝国の意向が強く反映されるものとなりますが、同時にそれは「犠牲者」概念をより拡大することにもつながり、その後「殉教者的英雄」から「無実の市民」へとその比重が移る要因にもなりました。

第5の点として、犠牲者数の統計そのものもっぱら西欧を基準にしている点も無視することはできません。たとえば、第一次世界大戦は1918年11月に休戦しますが、東ヨーロッパでは多民族帝国の崩壊や革命によって国境線が変化するとともに、内戦を含め戦争が継続することになります。これらは大戦での犠牲者を算出することを困難にするものでした。また、第二次世界大戦では第一次世界大戦以上に植民地など諸地域から動員がおこなわれ、また戦

場となりましたが、その犠牲者数は今なお「主要参戦国」の影に隠れがちです。たとえば、ナチス＝ドイツのフランス侵攻におけるフランス軍のアフリカ兵犠牲者は数万人におよび、その後ヴィシー政権やド＝ゴールの自由フランスともに植民地からの動員を続けますが、戦後同国の大統領が20カ国のアフリカ諸国の政府代表の前でその貢献を認めたのは、終戦60年目、2005年のことでした。

ここまで取り上げたいいくつかの数字からもわかるように、統計、とりわけ軍事統計の数字にはバイアスがかかっています。政治的にも、第二次世界大戦では、ユーゴスラヴィアのように出生率低下や死亡率増加など間接的な損失を含めた広義の犠牲者数(170万人)を公表し、より有利な補償条件を得ようとした国もあれば、ソ連のスターリンのように、戦略上の失敗に対する批判を避けるため実際よりも少ない数字(軍民合わせて700万人)をあげる場合もあり、これらのバイアスはその後の歴史研究のなかで、完全ではないものの、明らかにされてきました。このように数字を額面通り受け取ることは大きな危険をともないます。しかし、数字は傾向や変化、特徴を読み取ることが可能にすることもたしかです。たとえば、1944年7月のヒトラー暗殺未遂事件の時点で、ユダヤ人の80%はすでに殺害され、ソ連の犠牲者についても大半がそれ以前であったのに対し、ドイツ兵のそれは「わずか」30%にすぎなかった、という数字の突き合わせが、戦争の経験や認識を考える1つの手がかりとなるように。その際重要なのは、統計そのものも批判的に考察することであり、それを通して、戦争の歴史とその記憶の変化をより正確に読み取ることが可能になるでしょう。

(にしやま・あきよし／共立女子大学国際学部教授)